

# ミステリ読書案内

2024. 3. 23 発行元

第561号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 昨年出た本の中から

『このミステリーがすごい!』の巻末ブックリストから未読の本をチェックして4冊読んだ。4冊の中では、やはり山本巧次の『岩鼠の城』がお薦めか。豊臣秀吉・石田三成関りの歴史ミステリである。

### 能登半島地震のその後

今これを書いているのは2月の中旬。能登半島地震。輪島ようやくボランティアが入り、少しずつ片付け活動が進んでいるようだ。仮設住宅も最初の棟が完成し、入居も始まった段階。住む所と仕事などの復興が進むことを願う。

私は理科の教員だったので、今回の地震の発生源である活断層の動きの分析がどうなのかが知りたい。私が少しでもできることと言えば、地滑り地帯や山崩れがおきそうな

地域を見分けるとか、地盤の地下構造から液状化がおきそうな地域を予測するとかくらいなので、たいして役に立てることはないのだけでも…。地域ごとの「防災マップ」も整備されてきているので…。

長い目で見た時には、住宅を建てても安全な場所・地域というものがより明確に示されるようになるのかもしれない。建物の構造も含めて震度7に耐えうるものである必要がある。インフラ整備の部分でも事前にできる対応もあるのだろうなと思う。資金面の問題もあるが。

### 山本巧次『岩鼠の城』

昨年10月に光文社文庫から出た本。『鷹の城』の続編が出るとは考えていなかった。『鷹の城』は単行本で出たが、『岩鼠の城』は文庫書下ろし。江戸時代の南町奉行所の同心・瀬波新九郎がタイムスリップして、豊臣秀吉の時代へ。今回は信長の時代だったが、その十数年後。秀次事件の直後。新九郎はかつての仲間を救い出すため、石田三成に殺人事件の解決するよう命じられる。それは何人かの目で監視されている屋敷の裏庭で起きた事件。新九郎は同心として培ってきた尋問の仕方と推理を積み重ねて真犯人は誰かを考えていく。『鷹の城』ほどの劇的な場面ではないけれども、歴史の隙間を埋める役割りを果たすことに…。

### 佐藤青南『ストラングラー 死刑囚の逆転』

昨年5月にハルキ文庫から出た本。『死刑囚の推理』『死刑囚の告白』『死刑囚の悔恨』に続くシリーズ4冊目で完結編になる。このシリーズは「ストラングラー」と名付けられた連続殺人事件の犯人として死刑判決を受けた元警察官・明石陽一郎が本当の犯人ではないと信じた刑事・箕島朗の物語。箕島は14年前に恋人をストラングラーに殺されたのだが、刑務所に収監されている死刑囚・明石と面接する中で「これは冤罪ではないか」と思うようになり、何人かの仲間とともに真犯人を追い求める流れになっている。明石が牢の中で推理を重ね、箕島らがひとつずつ絞り込み作業を行う。本作では、箕島が精神的に追い込まれて被疑者を手にかけて、その後姿を消した場面からスタートする。長い物語の結末は…。

### 矢月秀作『紅い塔』

一昨年の11月に徳間文庫から出た本。『レッドホーク・シリーズ』の三作目に当たる。主人公は工藤雅彦。これまでの流れの中で殺し屋組織の頭首になった。しかし、組織内に工藤を頭首として認めたくない一派があって、新しいメンバーに入れ替わった相談役会で、工藤を呼び出して頭首の実力を試そうという話になった。立山山系の中に作られた七階建ての秘密の塔の中で、工藤は殺し屋グループと対戦する場が設けられた。階ごとに得意技の違うグループが待っていて…。ここからは死闘の場面が展開されていく。矢月の代表作である『もぐらシリーズ』に比べるとやや短調な内容組み立てになっている。

### 平谷美樹『貸し物屋お庸謎解き帖 五本の蛇目』

昨年6月に「だいわ文庫」から出た本。このシリーズは「招き猫文庫」から最初の四冊が出て、その後「だいわ文庫」に移って三冊目になる。時は徳川綱吉の時代の江戸。主人公は貸し物屋の娘店主を勤める「お庸」。両親を盗賊に殺され、そのかたき討ちに貸し物屋・湊屋の若き店主・清五郎の手を借りた関係で、湊屋両国出店を任せられるようになってからの話。基本は奇妙な貸し物を借りに来る客が「なぜそれを借りるのか?」という謎を追求していく形。なにしろ「無いものはない」と看板を出している関係もあって、次々と首を傾げる依頼が舞い込む。大工の棟梁の娘だったお庸の男勝りの口調が特徴になっている。

本書第三話の『五本の蛇目』は、雨の季節に蛇の目傘を五本借りに来た男の話。聞くと「お客が何人か集まるので…」という。疑問に思っただけで後をつけてみると借主はある長屋に入っていく…。初期の頃の短編は合理的な解決が多かったのだが、本書は妖怪絡みや、怨霊話が増えてきている。